法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-11-22

山名弘史先生を送る

法政大学，史学会

(出版者 / Publisher)
法政大学史学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政史学 / 法政史学
(巻 / Volume)
79
(開始ページ / Start Page)
198
(終了ページ / End Page)
209
(発行年 / Year)
2013-03-24

Hosei University Repository

山名弘史先生を送る

山名弘史先生は東京大学文学部東洋史学科助手を経て、一九八三年に法政大学文学部史学科に専任講師として着任され、一九八五年に助教授、一九九七年に教授に昇任されました。二〇一三年三月三一日をもって定年退任されることとなりましたが、その間、文学部史学科主任、法政史学会会長などを歴任され、史学科と法政史学会の発展に尽力されてこられました。

ご専門は主に清朝末期の社会経済史で、河原正博先生の後を継いで着任されてから三十年間、法政大学文学部史学科の東洋史を担当してこられました。とくに栃木利夫先生が第一教養部から史学科に転属された二〇〇三年までの二十年間は、お一人で東洋史を背負ってこられました。史学科で東洋史を学んだ学生で、先生の御学恩を蒙らなかったものはありません。

御退任の後も引き続き我々にご指導頂けることと、先生ご自身の研究の一層の進展を願ってやみません。

ここに先生の御経歴・御業績、お人柄の一端を紹介し、ささやかではありますが先生への感謝の意を表したいと思います。

山名弘史教授の履歴と業績

【略年譜】

一九四二年　九月二日　東京都に誕生。
一九四九年　四月　府中町立府中第一小学校入学。
一九五五年　三月　府中町立府中第一小学校卒業。
一九五八年　三月　明星中学校卒業。
一九六一年　三月　明星高等学校卒業。
一九七〇年　五月　東京大学文学部東洋史学科卒業。（大学紛争による変則）
一九七三年　三月　東京大学大学院人文科学研究科東洋史学専攻修士課程修了（文学修士）。
修士論文「清末浙江省龍游県の紳董の存在形態について」
四月　財団法人東洋文庫研究部嘱託。（一九八一年三月まで）
一九八〇年　三月　東京大学大学院人文科学研究科東洋史学専攻博士課程単位取得退学。

Hosei University Repository

四月　横浜国立大学教育学部非常勤講師。（一九八四年三月まで）
一九八一年　四月　財団法人東洋文庫奨励研究員。
一九八二年　四月　東京大学文学部助手。（東洋史学科）
一九八三年　四月　法政大学文学部専任講師。（史学科・東洋史）
一九八五年　四月　法政大学文学部助教授。

一九九七年　四月　法政大学文学部教授。
二〇〇六年　四月～翌年三月　国内研修。

【出講大学】
横浜国立大学
東洋大学
國學院大學
上智大学

【学会活動】
歴史学会会員。
東洋史研究会会員。
法政大学史学会会員。

【主要著作目録】
一九七五年　『中国土地契約文書集（金―清）』（財団法人東洋文庫）（共著）
一九七六年　「清末江蘇省の義倉―蘇州の豊備義倉の場合―」（『東洋学報』五八―一・二）
一九七八年　「一九七七年の歴史学会―回顧と展望―（中国―近代）」（『史学雑誌』八七―五）
一九八〇年　「清末江南の義荘について」（『東洋学報』六二―一・二）
一九八五年　「潘曾沂について―清末江南の一郷紳―」（『法政史学』三七）

Hosei University Repository

一九九三年　「林則徐と銀問題」（『法政史学』四五）
一九九五年　「道光期江北の米市場―沛県の小事件をめぐって―」（『法政大学文学部紀要』四〇）
一九九七年　「借項について―清朝地方財政の一齣―」（『法政大学文学部紀要』四二）
二〇〇〇年　「動項について」（『法政史学』五三）
二〇〇四年　「虧空について―動項補論―」（『法政史学』六一）
二〇〇七年　「清末の蘇州商務総会について」（『法政史学』六八）

Hosei University Repository

山名弘史先生を送る言葉

山名弘史先生を送る

後藤　篤子

山名弘史先生が定年退職を迎えられる。月日の流れを感じずにはいられない。私が山名弘史先生と初めてお会いしたのは、先生が法政大学文学部史学科に専任としてご着任になった一九八三年のことであった。奇しくも私はその年の四月、当時はまだ一人しかいなかった西洋史担当教員の故倉持俊一先生が国内研究を取られたことに伴う兼任講師として、はじめて法政大学のキャンパスに足を踏み入れたのであった。それが縁で私はその後六年間、兼任講師として法政で西洋史ゼミを担当させていただき、一九八九年には専任教員として史学科に着任することになった。つまり、山名先生とは四半世紀を越えるお付き合いということになる。

兼任時代にも、今は解体された第一校舎四階で西洋史研究室と東洋史研究室が隣り合っていたこともあり、山名先生にはたびたびお会いする機会に恵まれた。当時はまだ、ゼミ終了後に研究室で教員と学生が酒を酌み交わしながら熱く語り合うという「古き良き時代」で、西洋史研究室では故倉持先生のお人柄もあり頻繁に「酒盛り」があって、隣室の山名先生には随分ご迷惑をおかけしたのではないかと思うのだが、先生は常ににこやかに優しく接してくださった。

専任になってからは、山名先生がいかに学生思いで、真っ直ぐなお人柄であるかを、さらに深く知ることになった。先生は二〇〇三年度に旧第一教養部から栃木利夫先生が移籍してこられるまで、たったお一人で史学科の東洋史分野の教育を担ってこられたのだが、その間もその後も在外研究を取られることはなく、国内研究も二〇〇六年度に一度取られただけであった。着任が新しい私が先に在外研究を取らせていただいた折など、「私は自分の都合で取らないだけですから」と、遠慮する私を逆に励ましてくださったのだが、先生がご自分の「都合」と仰っていたのは、学生への責任感やご家族への配慮であったろうと思っている。教授会など

Hosei University Repository

で「はいっ」と手を挙げられ、ご自分が感じた疑問やお考えを忌憚なく口にされるお姿も、忘れられない。「史学科の良心」という、故倉持先生の山名先生評に得心すること、度々であった。

山名先生は三〇年にも及ぶご在職期間を通じて、教育とご研究のかたわら、学科主任や教授会副主任など重要校務に携わられ、入試業務にもずっと貢献されてきた。法政史学会会長も長くお務めくださった。私の中の先生はずっと変わらぬお若さで、先生が法政大学を去られるとは信じ難い思いである。先生の優しい笑顔、時折お見せになる「やんちゃ」な表情に接する機会が減ってしまうことは淋しい限りであるが、都内にお住まいなのだし、まだまだお若いのだから、法政史学会などでまたお会いできるものと信じている。

山名先生、長きにわたるお導き、本当にありがとうございました。そして、お疲れ様でございました。これからもお身体にご留意の上、ますますご研究を深められ、ご活躍くださいますよう。

惜別の言葉

澤登　寛聡

山名弘史先生は、前任の先生で私も教わった河原正博先生の後任として法政大学に着任されました。私が先生と実際におつきあい戴いたのは、平成八年（一九九六）四月からとなります。このときに私が着任したからですが、今年で十七年ということになります。

それまで私は、先生を遠くから拝見することはあっても、文学部史学科の中国史の先生であるという事以外、何か先生について知るという機会には恵まれませんでした。しかし、同じ学科でおつきあい戴くようになると清朝社会の研究をなされている事、そして、これが先生の最大の個性だと誰もが考えると思うのですが、大変に物静かで穏やかな先生である事、にもかかわらず、言わねばならないことは、教授会や委員会でも、いつもと変わらない穏やかな口調ではっきりと仰る先生である事などが次第にわかってきました。人はいろいろ議論を交わして白熱してくると我を忘れた物言いになってしまうことがあります。しかし、先生にあっては、この十七年間、そのようなことがついぞなかったと言っても過言ではないと思います。こうした先生の在り方はできるだけ人を傷つけないように慎重に配慮し、ご自身の見解を述べるという優しい気持のあらわれなのであろうかと拝察しますが、先生にはことあるごとに、こうした人としての在り方を教えていただいたように思います。多分、このような先生に魅せられた学生も少なくなかったのではないかと思われます。

また先生は、自転車部の部長や法政大学史学会の会長としても活躍されました。自転車部の部長の時は、私が重量挙部であった時期ともかさなって体育会の部長会でも、ご一緒させていただきました。法政大学史学会ではあの温和な語り口で会長としての挨拶をなされていたことが懐かしく想い出されます。

最後になりましたが、一昨年は、わたくしの私的な事情から公務を代わって戴いたりと大変、お世話になりました。末筆ですが、

Hosei University Repository

心からお礼を申し述べ、先生の今後のますますのご活躍を祈って惜別の言葉に代えたいと思います。

山名弘史先生を送ることば

長井　純市

山名先生、長い間、研究・教育・学務等におきましてご尽力なされましたこと、お疲れ様でした。先生のおそばで共同作業を行わせていただいた後輩教員として、心より感謝申し上げます。

先生は、研究・教育・学務いずれの分野においても、先生らしさを保ちつつ、役割を着実に果たされました。先生のそうした落ち着いた姿は、ややもすると急いだり、焦ってイライラしたりするわれわれ後輩教員に安心感を与えるものでした。

先生に関する一番の思い出は、ここに記すことはいささかふさわしくないようにも思いますが、先生のご体調が不良となり、先生が緊急に職場から病院に行くこととなったときに、先生のおそばについて私も同行したときのことです。私には初めての経験でしたので、大いに驚き慌てました。しかし、病院到着後、治療により先生はまもなくお元気になり、さらにご家族の方が病院に到着なされ、無事に引き継ぐことができました。そこで初めて私も安心致しました。いろいろな事情がおありかとは思いますが、先生が真剣に職務に励んでいらっしゃることを証する事態であったと、そのときようやく気付きました次第です。

先生の研究分野については、私は専門外の者として云々することは出来ませんが、着実な考証に先生の研究手法の特徴（そして特長）があるように拝見しています。即断を排してテキストとなる文献をじっくり読むこと、比較検討すること、そして考察（熟考）すること、そうした学究として守るべき最も大切な基本マナーを守り続けていらっしゃると思います。最後の年度となった二〇一二年一二月、文学部九〇周年記念行事においてパネルディスカッションのため登壇され、先生が歴史学を通じて人文科学の魅力について語られたことは、そうした先生の研究姿勢をそのまま表現したものでした。

先生のご指導の下、東洋史を学んだ多くの学生は、年齢を加えるたびに、先生の温厚な人柄と共に、先生の学恩に感謝し、幸福感を増すことと思います。それは、近年、文部科学省を中心として、大学生が卒業時点で身に付けているものとされる「学士力」などという概念に象徴されるような短期的な教育効果とはまったく別のカテゴリーに属する、もっとはるかに大切なものとなることでしょう。それは、ひいては本学自体が先生のご在職に感謝し続けることでもあります。

先生が、歴史と同様に、今目の前にある諸事象（我々同僚を含む）をじっくり観察し、考察（熟考）し、その上でご自身の言動を発するという姿は、私の模範とするところです。

今後も引き続き先生のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。そして、今後も「法政大学人」を見守り、ご教導賜りますようお願い申し上げます。

Hosei University Repository

山名先生を送る

加納　格

山名先生がご退職の時となった。私の史学科への着任時期は、現在の教員の中で比較的新しい方に属する。着任時におられた六名の先生方の中でも山名先生は最古参であるとその時聞いた。東大で助手を務められてから法政大学に来られたということであったので、経歴に重なる部分もあって何か親しみを感じたものである。

その後授業など様々な校務をご一緒することもあり、だんだんに人となりに接してその紳士的で温厚なお人柄を知ることとなった。何かあっても動ぜず、沈着冷静に物事を処理されるのは、先生が伝統ある東洋史学で薫陶を受けてこられたことと無関係ではないのであろう。先生のそのビヘイヴィアに何事につけてもガサツな私は、幾度となく助けていただいた。

先生のご専門とされる中国近代史は、私の関心であるロシア近現代と強く関わりをもつ研究分野である。殊に一九世紀から二〇世紀にかけては露清関係、ソ中関係として一際関係が強かった。その関係の仕事では先生の中国近代史の深い学識で手助けいただいた。外国語表記一般についていえることであるが、ロシア語表記の中国地名というのは、私にとっては難点なのである。今後この方向でもう少し仕事をする心算でいるが、また先生にお尋ねすることがあるかと思っている。是非今後も宜しくご教示ほどお願いしたい。今後のご厚誼とこのお願いをもって送る言葉としたい。

山名先生、お疲れさま

中村　純

私が初めて山名先生にお目にかかったのは一九八五年の五月頃ではなかったかと思います。その時、第一教養部新任教員として初めて山名先生と入試関係業務をご一緒させていただきました。そしてその後二〇〇七年まで二十年以上にわたってほぼ毎年同じ業務で働くこととなりました。当時のメンバーはすでに退職されたばかりでなくサッサと別の世界へお引越しされてしまった倉持先生、第二教養部から社会学部に移られて昨年度退職された相良先生、同じく第二教養部から人間環境学部に移られて数年前に退職された松田先生、私と同じ第一教養部から文学部に移ったあとやはり数年前に退職された栃木先生でした。その後メンバーにはいろいろ出入りがありましたが私が初めてあの仕事を始めたときのレギュラーのメンバーでは今や私だけが残されてしまったということになります。かくいう私も二〇〇八年以降その仕事をしていませんが。気骨の折れる仕事でしたが山名先生はとても情緒の安定した方で、こちらが頭に血が上ったり、落ち込んだりした時ふと見るといつも山名先生が穏かな微笑みを浮かべて淡々としておられるのを見て、気を取り直すことになるのです。長い勤続年数にしては国内研究も一度くらいで在籍の間ほとんどあの仕事を外れることがなかったように伺っています。長い間本当にありがとうございました。

Hosei University Repository

山名弘史先生を送る

小口　雅史

私と山名先生の出会いは、一九八二年にまで遡る。私のように日本古代史を勉強していると、比較という観点から中国古代中世史研究との接点は多い。私が大学院博士課程（国史学専門課程）に進学したその年、山名先生は助手として東洋史学研究室の助手として、東洋文庫から戻ってこられた。先生は在職一年で法政大学に転出されたので、接点があったのはわずか一年間だけではあったが、東洋史には時代を問わず知人が何人もいたこともあって、その研究室には結構出入していたから、若かりしころの先生のお姿も何度も拝見した。もっともそれ以後は、私が最初の奉職先である弘前大学から法政大学に転任してくるまでは、おそらく一度もお目に掛かったことはないはずである。それでもその印象は強く、久しぶりに法政大学で再会できたときにも、あまり変わっておられないような感想を持ってしまったのを覚えている。法政大学への赴任が決まった私にとっては、法政大学＝山名先生のおられる大学、であった。

山名先生といえば、誰でもすぐ思い浮かべるのは、そのトレードマークである、明るいグレーの背広である。真夏の本当に暑いごく一時期を除き、清潔感あふれるこのお姿は一貫している。私など、薄い色の洋服は汚れが目立つので（実際すぐに汚してしまう）、あまり着ないのであるが、山名先生は本当にきれい好きなのだと思う。

史学科の共同研究室や多くの教員の研究室のあるボアソナード・タワー一五階の流し台の汚れをいつも気にしておられた。先生の鶴の一声で、「ここはみんなが使う場所です。奇麗に使いましょう」というA４大の紙が貼られたことは記憶に新しい。こうした清潔感ないし正義感は、教授会発言にもしばしばみられた。少しでもおかしいと思ったことは、「はい！」といって挙手され、忌憚のないところを述べておられた。あの勇姿がもう見られなくなるかと思うといささか寂しいし、文学部にとっても大きな損失である。我々がそうした気風をしっかり継いでいかなければなるまい。

先生、長い間、本学のためにご苦労様でした。これからもご健康に十分留意され、お元気にご活躍ください。

山名弘史先生を送る

小倉　淳一

一九九六年度の東洋史概説の授業は、通年の二科目（概説一および概説二）を山名弘史先生が担当されていた。学部二年生だった私は月曜と金曜に配置された授業を受講し、中国の歴史を中心とした本格的な東洋史を初めて学んだ。

当時の受講ノートが手許にある。実家の押し入れに段ボール一箱にしまい込んであるもので、滅多に開くことはないのだが、懐かしさとともに学生時代のノートをめくってみると、概説（一）は宋代まで、（二）は元代以降の内容となっていた。日本史を専攻しようと大学に入った私は、外国史の勉強はあまりしてこなかっ

Hosei University Repository

たこともあり、中国史の年表すら十分に頭に入っていなかった。山名先生は概説の授業の始めに試験用紙をお配りになり、これは試験ではないと前置きされた上で、「皆さんの知識と東洋史に関する学習のレベルを知りたい」とおっしゃり、まずはそこに中国歴代王朝を継起した順序で書き上げるよう指示された。そのときの答案を出すのがひどく恥ずかしく、一年間しっかりと授業に集中しようと心改めたものである。

とはいえ高校世界史のレベルにとどまっていた私には、授業を理解することで精一杯であった。中国の歴史は長く、そして深い。先生のお話はさまざまな方向に広がり、学ぶべきことはいくらでもあるように思われた。前期・後期にそれぞれ試験が準備されていることもあり、その対策に頭を痛めたことも、今となってはよい思い出である。

最近になって先生に二年生時の授業のことをお伝えすると、意外なお答えをいただいた。その年は通常の年とは違って、兼任の先生のお仕事の事情があって、先生が二つの概説をお一人で担当された年であったとのこと。つまり、私たちは山名先生による中国通史を受講できた幸運な学年に属していたのであった。先生はいつものようにほほえみを浮かべられながら、その年の授業のことを懐かしそうにお話ししてくださった。先生に教わった学生の一人として、先生が当時のことをよく覚えておられたことが、どこか誇らしく思われた。実際には、先生に散々ご面倒をおかけした学年の授業として印象に残っておられるのかもしれないのだが。

その学生達も四十の半ばを過ぎ、あの頃の先生の年齢を超えた。しかし不思議なことに、腕組みをしながらほほえんでおられる先生の立ち姿は、二十七年前の授業の当時から、ほとんど変わっておられないようである。先生にお目にかかるたびに、お変わりのない姿と優しいお言葉をいただけるような気がするのである。今後とも先生にはますますご健勝でご活躍いただき、私たちにお力添えいただけるようお願い申し上げる次第である。

山名弘史先生を送る

齋藤　勝

私が赴任した三年前、ちょうど山名先生が学科主任を務めておられ、毎月ある委員会でご一緒させて頂いた。山名先生は、専任の経験のなかった私に職務の内容や沿革、法政大学や文学部史学科のあり方について一つ一つ丁寧に教えて下さった。また、同じ中国史を専門としており、同じ大学・学部学科の出身ということもあって、東洋史という学問についても色々とお話し頂いた。その後も今日まで、しばしば二人でお話をさせて頂く機会があり、時には数時間に及ぶこともあった。とくに昨年の夏にはお互いのゼミの学生とともに中国の江南地方を旅し、ホテルでは部屋も同じくし、先生にはきっと迷惑だったに違いないが、夜遅くまでお話しさせて頂いた。どれもよき思い出であり、ご退職の日を迎えるにあたって山名先生には感謝の言葉しかない。

山名先生とご一緒していると、どこか和んだ気持ちになる。これは誰もが経験したことではなかろうか。ご退職をひかえた今年

Hosei University Repository

度になって、学生だけでなく教職員からも「隠れ山名ファンなんです」と言われることがしばしばあった。「隠れ」である必要はないとは思うが、ついつい「隠れ」とつけてしまうのも、山名先生の奥ゆかしいお人柄の表れなのではないかと思う。先に記したように山名先生と私は専門や出身校が一緒である。さらに育った土地もほとんど一緒で、四十歳になって初めて専任職を持ち法政大学に赴任したところも一緒である。だからかどうかは分からないが、お話ししていると、お互いの意見が一致することが多かったように思う。ひそかに私自身は「山名先生と自分は似ている」と思っているが、そのお人柄に関しては到底、真似することが出来ない。

山名先生の真似をすることは、私だけでなく、おそらく誰にも出来ないだろう。しかし、三十年の長きに亘って法政大学文学部史学科の東洋史を背負ってこられた山名先生の姿を心にとどめ、そのご意志を引き継ぎ育んでいくことは不可能ではないと思う。後を継ぐ者として、山名先生が築き上げてこられたものをさらに発展させていくことを誓って、山名先生を送る言葉に代えたい。

最後に一つだけ付言しておきたい。山名先生と私が似ているという主張に同意してくれた人はこれまで一人もいないので、おそらくそちらが正しいのだと思う。

山名弘史先生を送る言葉

塩沢　裕仁

山名先生とは先生が法政にご着任されてからのお付き合いであり、かれこれ三〇年にもなります。したがいまして、先生のご退官にあたり何を書くかと考えれば考えるほど書くことが浮かんできます。そこで山名先生の学者として、また人間としてその人柄を知ることのできる印象的な出来事を一つ選んで記すことにしたいと思います。

山名先生は学生の教育、大学の業務などに奔走されていたため、ご自身の研究対象である中国にお出かけになることは数える程しかありませんでした。その内、私の中国滞在中ですが、山名先生が洛陽にお越しになったときのことです。先生が黄河をご覧になりたいということで、路線バスを乗り継ぎ、洛陽の北、孟津県と吉利区との間に架かる黄河大橋に出掛けました。バスで大橋を渡り、風が強いのでそのままバスで引き返すかと思いきや、いきなり「塩沢さん、歩いて渡れませんかねぇ」と。この橋は黄河の中でも比較的川幅の広いところに架けられているため、その長さは四キロを超えます。歩いて渡れば優に一時間はかかりますし、ビュウービュウーと川風が吹き付けるなかを歩くことになります。歩いて渡れないことはありませんが、洛陽で数々の遺跡を調査していた私でもこれだけは初めての経験です。洛陽を訪れた方々は橋の中央まで車で行き写真を撮って帰りますが、それでも十分に満足されております。「歩いて渡れないことはありませんが…」と前代未聞の行動に躊躇したものの、結局お情けのように設けられた大橋の側道をとぼとぼと歩きはじめました。三分の二ほど渡ったところに滔滔と流れる河水があります。流れの幅自体は二百メートルほどですが両側に数キロの河川敷を持ちますから、いつみて

Hosei University Repository

もその景色は雄大の極みです。飛ばされるほどの川風が吹き付ける中、そこで先生ははたと立ち止まり、じっと川面を見つめながら、ご自分の語ってきた学問の在り様を黄河に語りかけるように一言、「私はこれまで黄河を見ずに黄河のことを語ってきました」と。中国農業経済史の泰斗として黄河には一際思い入れがあったと思われます。

語り尽くせないことばかりなので、何方もご存じない山名先生の一面を記しました。山名先生の人柄の良さは誰もが認めるところですが、山名先生との長年のお付き合いの中で私にとって最も印象に残る光景であり、黄河を見つめていたその眼差しに山名先生の学問と向き合ってきた姿勢が凝縮されていると感じた次第です。これを読まれた山名先生はきっとニコニコしながら「そんなこともありましたかねぇ」とおっしゃるに違いありません。その語り口を思い浮かべてみてください。その山名先生の微笑みこそが法政東洋史の看板でありえたといえるでしょう。

山名先生を送る言葉

竹茂　敦

山名先生が二〇一二年度で退職なさるということはずいぶん以前から承知していましたが、正直言って、今年度に入ってもあまり実感がわいていませんでした。山名先生は、私が山名ゼミに入った九〇年代半ばにはすでに髪の毛は今のような白さでしたし、ゆったり落ち着いた物腰も昔からで、初めてお目にかかってから二十年近くが過ぎましたが、年をとられたという感じがしません。

山名先生の思い出としては、先生の人柄の良さを感じさせる出来事をつい最近のことのように覚えています。二年生で山名ゼミに入ってしばらくたった、おとなしい私もそろそろ名前を覚えてもらった時期のことだと記憶しています。当時のわれわれ学生の間では、そのおだやかな口調ゆえに「授業での山名先生の声は子守唄」とささやかれていたのですが（現在も?）、御多分に洩れず、私も先生の東洋史概説や特講では意識が〝違う世界〟に飛ぶことがしばしばでした。そんな概説の授業終了後に出席カードを渡しにいった際のことです。にこやかな笑顔の山名先生から「よく眠れましたか?」と尋ねられ、答えに窮した私は思わず「はい、おかげさまで」などと答えてしまったという〝事件〟がありました（一応この場を借りて言い訳しますと、本当に反射的な返答で、まったく他意はなかったのですが…）。しかし、山名先生はにっこりと微笑んで「それはよかった」との反応で、その笑顔が何とも柔和で、先生の授業に出始めてまだ日の浅かった私は「この先生は、本当に人柄が良いのだな」との印象を強く受けたのでした（と〝思い出〟風に書いてみましたが、実際に山名先生にお尋ねしたら、「いや、あれは皮肉だったのですよ」と言われたりして…!?　ただ、そんな時もにこやかな笑顔に違いないと思います）。

このようにけっしてまじめとは言えない学生だった私も、三年生になると山名先生の研究室に入り浸るようになり、先生から中国史のよもやま話を伺う機会にずいぶん恵まれ、ご専門の清朝時代はもとより、古代から現代までの中国に関する博学多識さに、

Hosei University Repository

「大学の先生とはこういうものなのだな」と感銘を受けるとともに、史料を繰る楽しさを教えていただきました。また、私が国際政治の大学院に進んだ後は、年に何度か研究室にお邪魔すると（アポイントも取らずにいつもふらりと研究室に訪れるという何ともぶしつけな元教え子でして…申し訳ありませんでした）、昔と変わらない、中国へのおだやかな眼差しと愛情がとても山名先生らしく思えます。

ご退職にともなって、山名先生のおだやかな笑顔とご見識を拝することのできる機会がこれまで以上に少なくなってしまうのは何とも残念です。長い間どうもお疲れ様でした。先生のご健康を祈りつつ心より感謝を込めて。